

# 近代とイスラムが調和した国マレーシア

## 第 4 回出張講義 : Short Course in Asia 2016 を終えて

著者名 櫻井 和朗

北九州市立大学 国際環境工学部、教授  
高分子学会国際交流委員長

季節外れの寒波で桜の開花が遅れている肌寒い日本を後にして、6 時間のフライトでクアラルンプールに到着した。入国手続きの列に並んでいると、バカンスに来たと思われる短パンにノースリーブの大柄な白人女性に混じって、スカーフを頭から被り足元まで隠れるロングスカートの小柄な女性を見かける。イスラム教を信じる女性が着るヒジャーブである。マレーシアは敬虔なイスラム教徒が住む国だと再認識する。空港の建物を出ると、排気ガスと香辛料が混ざった濃密な空気に包まれた。タクシー乗り場には、ブーゲンビリアの赤い花が満開で、強烈な太陽光線が照り付ける。熱帯アジアに来たという緊張感を感じる。

今年のアジアでの高分子の出張講義は、マレーシアの首都、クアラルンプールで行うことになった。この出張講義は、明石前会長の時から始まった。アジアでの高分子科学の普及と、我が国と日本高分子学会のプレゼンスを高めることを目的としている。相手国に出向いて、高分子合成から物理化学の入門コースをその分野の専門の先生方に英語で講義をしてもらう。2012 年から始まり、タイ・バンコック、ベトナム・ハノイ、ベトナム・カントウを訪問し、今回はマレーシアの高分子学会の招待で開催することとなった。高原会長が高分子学会の紹介、櫻井が高分子科学の歴史を簡単に紹介したあと、京都工織の中先生と名古屋大の佐藤先生に高分子合成を、櫻井が分子量の決定方法などの特性評価を、長岡技科大の河原先生には粘弾性とゴム、そして高原会長には最後に高分子構造に関して講義をお願いした。前回の反省から、できるだけ基礎に絞って講義をすることにし、あらかじめキーワードを選んで、それらの簡単な説明をした冊子を準備した。また、基礎の講義だけでは面白くないと、研究発表のシンポジウムを翌日に行うこととした。

会場となったクアラルンプール大学 (UniKL) は、2002 年にマラ (MARA) 公団が設立した私立大学で、全土に 12 のキャンパスを有し、産業振興のリード役を期待されているマレーシアを代表する大学である。会場となったのはクアラルンプールの中心街にある 29 階立ての近代的なビルの校舎であった。



図 1 ホテルから見たクアラルンプールの街。近代的なビルが立ち並び、急速に発展している。

Opening ceremony が大がかりなのには驚いた。まず、コーランのお祈りから始まって、副学長や学部長、学会長の挨拶がある。我々、日本からの講師は、Distinguished guest と紹介していただいた。私と高原先生は、最前列のフカフカの大きな革の椅子が指定された座席であった。儀式が大掛かりなのに比べ、会議の細部の詰めが甘いところがあり、ややアンバランスな感じを受けた。プログラムが直前にならないと決まらず、日本側の担当者としてはハラハラした。しかし、決定的なミスにならないで運営できるところがこの国のすごい所なのかもしれない。彼らはやや自虐的に「マレーシア流」だと言っていた。



図 2 冒頭の挨拶をされる高原会長



図 3 講師の (左から) 中先生、河原先生、佐藤先生と基礎コースを聴いている学生。青の制服は UniKL のマラッカ校から来てくれた高分子専攻の学生たち。

基礎コースにはマレーシアの教員も参加して下さったこともあって、質疑応答は活発であった。学生達は、キーワードの冊子に沢山のメモを取っていた。女子学生の方が男子学生より熱心という傾向はどここの国でも同じである。



図4 基礎コースに参加した学生と。女性はヒジャブと呼ばれるスカーフとロングスカート、男性は黒い帽子を見つけている。



図5 ポスターは全体で 18 件の発表があった。天然ゴム、砂糖キビの搾りかすの利用など地元産の天然高分子の有効利用を目指している研究が多かった。



図6 懇親会。右から、マレーシア高分子学会の会長 Rusli Daik 先生、UniKL の副学長で京都工織で学位を取られた Azanam Shah Hashim 先生、高原会長、UniKL マラッカ校の学部長 Ahmad Naim Ahmad Yahaya 先生、中先生。

懇親会には、UniKL の研究担当の副学長である Azanam Shah Hashim 先生に来ていただいた。Hashim 先生は京都工芸繊維大学の鞠谷信三先生の研究室(当時) で学位を取られ、前の週も国際交流で京都に滞在されたとの事であった。このような繋がりを大切にしていかなくていけないと思った。一日、講演をしたり、質問をしたりで、喉が渴いていたのだけど、いつまで待っても冷たいビールが出てこない。そうか、イスラムの国ではお酒は飲んではいけないのだと気がついた。しかし、マレーシアの良い所は、すこし高い税金を払えばお酒がどこでも飲めることである。もちろん、懇親会の後に、シンガポールの地ビールの Tiger で反省会をしたことは言うまでもない。

中近東での戦争、ヨーロッパでのテロや ISIS のニュースが毎日のようにテレビで流れるため、正直、イスラム教に対する偏見がぬぐえない。しかし、今回の出張講義でヒジャブを被った学生と話してみると、日本の若い女子学生とまったく変わらない。友達と楽しそうに笑い、スマートフォンのキーを高速で器用に入力し、欧米の音楽を愛している。良い研究をして、技術者になりたいとの夢を持っている。将来は日本に留学したいと言ってくれた学生もいた。

ところで、我々が出張講義で訪れる国々は、旧日本軍が軍靴で踏み荒らした地域でもある。マレーシアは太平洋戦争の初戦で戦地となった。開戦劈頭にコタバルに上陸した陸軍は英国軍と交戦をしながら、ゴムの木の畑の中を自転車でマレー半島を南下して、クアラルンプールを占領し、難攻不落と言われたシンガポールの要塞を攻略している。また、英国東洋艦隊の新鋭艦が日本海軍の航空機で沈められたマレー沖海戦の戦場でもある。英国と日本が戦った戦争だが、住んでいる場所が戦場になり、家が焼かれて、戦いに巻き込まれたマレーシアの人々はたまったものではなかったと思う。戦後の平和外交のおかげで、今では国全体が極めて親日的であるし、若い人は、日本は清潔で人々は優しく、科学技術が進歩した国との印象を持っていてくれる。しかし、アジアの国では日本陸軍が極悪人として登場する映画がいまだにある程度の人気を得ていることを我々は忘れてはいけないと思う。さらに、付け加えると、日本のアジア南下政策のため天然ゴムの供給に危機感を抱いた米国は、Exxon に合成ゴムの開発を委託し、それに参加した P. J. Flory がゴム弾性の理論を生むきっかけとなった。

最後に、今回の出張講義でお世話になった、マレーシアの担当者、講義に参加するために、マラッカから 2 時間かけて通ってくれた学生さんや教員に感謝をしたい。

## 図表掲載の分量目安

テンプレート 2 頁目

-----本文ここまで-----